

・雨でも休まず、275回、276回・

「小原本陣の森・若柳嵐山の森」

- ・定例活動 : 12月 6日 (第一日曜日) : 小原本陣の森・団地化を目指す、弁当持参
*ベテラン向き、担い手育成、技術向上、参加費400円、
- ・定例活動 : 12月20日 (第三日曜日) : 若柳嵐山の森・里山交流、多様な森林活動
*一般むき、参加費400円、主食・自分の汁椀、飲料水。

***注意1 : 初参加者は、9時15分までにJR相模湖駅前集合、ベテランは各自森へ。**

・服装 : 汚れても良い服装、着替え・滑らない靴。

・持参 : 成るべく皮製手袋、万一の怪我に備えて保険証、飲料水

***注意2 : 危険管理・救急体制 : 森林ボランティア保険他、会として可能な限りの体制を**

敷いていますが「怪我・事故は、自己責任」です。

相模原市・緑区 : 森林資源を生かす事業創造 : “Green hub city” をめざせ・

戦後、市政が施行された市が、政令市になるのは相模原市が全国で初めてである。政令都市としては、全国で19番目、神奈川県内では、横浜市、川崎市に次ぐ3番目である。全国18の政令市を見渡すと、それぞれその地ならではの、特徴を有している。横浜市の場合は国際貿易港、川崎市は、京浜重工業地帯である。相模原市の現状の特徴は何か。敢えて言えば、交通網が発達しているということか。加山・相模原市長は今後の町づくりを「暮らし先進都市及び、内陸ハブ・シティ」をマニフェストとしている。相模原市は、政令市指定後は、南区中央区、緑区(橋本地区・大沢地区、藤野町、相模湖町、津久井町、城山町:人口17.5万人)の3区になる。

当会は、緑区に“Green hub city”として、これを具体的に表現してみたい。即ち、相模川源流は富士山にあり、その中流緑区には、相模湖・津久井湖がある。更にJR中央線、中央高速道を上流に辿れば山梨、長野、新潟と200万ha以上の広大な森林資源地に繋がる。前面に神奈川890万人、東京1200万、計2100万人の消費人口に面している、その接点にある。地の利として、何と言う幸運なことだろう。

森林の現状は、荒廃の一途を辿っているが、世界の潮流は急速に環境産業の開発に向かっていく。現状、我が国では、森林はお金にならないからと放置されている。然し、森林資源の主役・木材は無限の太陽エネルギーを蓄積し有機化合物の基礎元素、炭素(C)の塊である。然し、その他の産業、例えば、パルプに大きな需要があり、木質バイオマスエネルギーは、地域冷暖房や発電に使えば大きな需要が掘り起こせる。木材・建築材は複雑な流通経路のため難しいが、時間をかけてその状況を梳き解せば良い。

森林資源・木材は更に、リグニン、セルロース、炭化物、エタノールなどに潜在需要がある。巨大な森林資源を背景に首都圏:神奈川・東京・千葉・埼玉のマーケットを掘り起こせば、森林の有効活用に結び付く。このような視点に立てば、相模原市は、環境都市として全国に名を馳せるだろう。

小原本陣の森：定例活動報告

Forest Nova☆ 麻布大学2年 齊藤駿一

陽も短くなり、活動後は肌寒い季節となってきました。
身をもって季節の移り変わりを感じることができるのも山で活動する魅力の1つだと感じています。

今回の活動としては、現在活動している中里さんの山まで行く際にどの経路を通るのかを決定して目印の杭を打ちました。

その後は中里さんの山にて土留め作りを行いました。

土留め作りとは、斜面に横たわっている木を切り株などにかけて、等高線に沿って並べ直し、近くに落ちている枝や葉を木と地面の隙間に入れて完成です。

土留めには、斜面の土壌が流れるのを防ぐ役割があります。

初めのうちはとても元気よく取り組んでいました。

しかし、とても急な斜面で体力の使う作業だったので、活動が終りに近づくにつれて口数が減り、ほとんど話すこともなく黙々と作業していました。

その分、活動が終わった後の達成感は大きかったです。

参加した多くのメンバーに笑顔がありました。



とても大変な作業ではありますが、自分たちにできることをひとつずつ取り組んでいき、森林をより良い状態にしていけたらと思っています。

.....

この日、石村は午前中、小島建設と「小原の郷・花壇づくり」の相談をし、午後は木田木工所に間伐材の利用方法について相談しました。

当会活動の三原則は「環境・経済・持続的な社会」ですが、最近、新しい森林政策を模索していろいろな人にとって、知識・情報・発送方法を学んでいます。

相談を早目に切り上げて中里山の作業現場に戻ったら、この日参加の森仲間たちがもくもくと作業に励んでおり、見違えるような森林風景に変わっていました。(石村記)

参加者：会員 23 名、鶴ヶ台小学校・親子参加 34 名、望星高校 22 名、日大・桜井教室 28 名、早大・金山教室 25 名、学生連合フォレストノバ 8 名、計 143 名。紅葉のマッ盛り、落葉のタップリの森に老若男女入り混じっての音が響く。

- ・まず、高橋林業士の経路づくり講学生たちが集う。高橋さんの軽妙な講義に学生は興味津々。講義後、経路づくり実習は、森の入口近くの軟斜面で実習。なるほど納得の経路づくり。
- ・日大・桜井教室 28 名は、造林演習・現存林分調査（毎木調査）のために森に分け入った。
- ・早稲田大は金山先生を総監督に 2 班に分かれての間伐実習と搬出作業。搬出作業は重労働。初参加の早大生たちに「森はどうですか？」の質問に、即座に「空気が上手いッ！、汗が心地よいッ！」の明快な反応。
- ・望星高校は、整備地区の拡大。望星に隣接地の蔓切りに始まって、ボサ刈り、低木間伐、林床整理。
- ・鶴ヶ台小グループは、内野講師による親子森林探検講座。元気のいい子供たちは森に溶け込んで、煙のような孢子を出す茶巾袋キノコを爆発させたり、朽ち樹の穴をほじくったり。午後はフォレストノバの学生が「ネイチャーゲーム指導」、クイズと共に森を歩き・考え、森林を理解して行く。腕白どもの突っ込みに学生らも元気ハツラツ！。親子で来る森の楽しさは、一生の思い出になるかも知れない。
- ・花畑班；斎藤会員が 1 年掛かりで準備した扶養土を畝に敷いて色々な種を大いに撒いて来春が楽しみ。
- ・木工班；小原の郷・間伐活用でデモンストレーションに作っていた「間伐材ベンチ」が大好評で大量の予約注文が舞い込んだ・・・ので、大坪班長一行、小原作業所に全員移動。



* 140 人以上の参加のためのお昼の準備に、炊事班、佐藤ママの応援を得て、余裕の対応。お昼に帰ってきた、腹を空かせた森林作業一行は、満足・満腹。

* 参加者多数、活動多岐に付き、終礼は各班長の判断に任せ。何に事故もなく、無事終了。

・後紀

隣国：中国は、毛筆（書道）が全ての中国の人々に教養であるそう。我が国と中国との間に毎年、書道を通じた大規模な国際交流があり、来年夏も中国各省の要人の子弟、約 80 人が選ばれて日本に来る由。中国の植林計画に合わせて日本の民間・森林活動の現場を視察したいとのことで、その森林視察現場に当会が選ばれた。15 日のこの定例活動日、中国からの帰化人・日本側の代表秋山さんが家族連れで事前視察に来た。秋山さんは、和気アイアイとした当会の雰囲気を入り込んでくれて正式な決定となった。

小原本陣祭り：11月3日（祭・火）

秋晴れ・快晴・適温の文化の日、小原町最大にして箱根の「大名行列」に匹敵する「第16回：小原宿大名行列」が開催された。つくづく思うのだが、人口も少なく産業もなく、あえて言えば、県指定文化財・小原本陣しかないこの地が、良くも16年間、この祭を続けてきたものかと町の人々を称える。今回も当会として何らかのお手伝いがしたいと、休憩場所に間伐材を生かしたテーブル・ベンチをつくることと、「緑のダム FSC 材積木」を祭の賑わいに協賛出品させて頂いた。



幸い、大名に扮する加山市長の行列の出発点は、当会の木工班の間伐材テーブル・ベンチの制作場の直ぐ脇で、市長出番前のひと時を休んで頂く事が出来た。捨てている間伐材のこんな有効な使い方を知って頂けた事も幸運であった。



祭は、かつてない程の賑わいを見せ、政令都市を来年4月に迎えて、幾ばしの華を添える事が出来ただろうと、その成功を喜ばしく思った。

当会が、このような町の祭に参加する理由は、単にお祭り騒ぎが好きだと言う訳ではない。小原町に溶け込む事によって、町の人々の苦しみ・楽しみを共有することで町を理解し、地域の森林活性化に何が出来るかを探るという事であり、荒廃の森林を解決する方法を考え・実践するためにある。

今回は、捨てている間伐材でもベンチやテーブルに代える事が出来る事を証明した。当会がこれらをつくる事が出来る事を証明したことによってベンチ制作の相当数の予約を受けている。

その数は、木工班が月2回の森林活動では、とても造りおおせないので相模湖町の木工製作所に委託製造を計画している。こんな事から、地場産業の創出にも繋がるのではないかと。間伐材を生かす事が出来るならと、市総合事務所（藤野・相模湖・津久井）の標識板の50枚ばかりを受注して地域の木田製作所との協働制作にも入っている。

また、今年は、毎日新聞社（水と緑地球環境本部）から、「森林NPOの自立モデル」を作れと命題が与えられているが、捨てている間伐材で地場産業が興るなら、自立した活動の具現化にも繋がる。

行政からの補助金・助成金を受けることなく、自然保護団体から支援金を受けることなく、森林NPO活動が維持する事ができるようになるなら、もっと自由な発想と実践ができるだろう。深く掘るには、それなりのエネルギーがいるが、当会は、その水脈に近づいているのかも知れない。

FSC 認証審査；9月30日：今年は「CoC：Chain of Custody；流通管理」審査年



今年は、「緑のダム・FSC材積木」の商品化に目処がついたので、その流通審査を受けた。

- 1、原木審査：認証機関 SGS ジャパンの佐々木審査員による製品流通管理審査は、先ず材の搬出状況写真、林内乾燥状況証拠写真記録のチェックを受けた。
- 2、加工審査：積木加工者；丸富工芸（小田原市柏山）工場において、原木の保管状況、半製品保管状況、出荷記録のチェックを受けた。
- 3、仕上審査：福祉作業所・やまのべ館（相模湖町与瀬）仕上げ加工場での仕上げ品保管状況、出荷記録のチェックを受けた。
- 4、完成品保管、出荷状況
イ、完成品保管状況を受けた。
ロ、出荷状況：出荷伝票に FSC ロゴマーク、認証番号が欠落していた。不適合な処理として改善命令が出された。対策：ロゴマーク、認証番号（SGS-FM/COC-002323）を刻印することで解決する。

神奈川県主催：森林循環フェア：10月6日～8日

安い外材の流入のため、国産材・県産材が売れなくて我が国の各地で国産材を得るための工夫がなされている。神奈川県は特に、山林が大都会に隣接しているために山林地主は、苦勞して林業に携わらなくとも会社勤めを選ぶのは当然の成り行きで、国は勿論、神奈川県や東京都は林業振興や山林保全・再生に躍起になっている。現実には、そう簡単には解決策を示してはくれない。県民・市民がそう言う県政・林政にクレームを付けるのは簡単だが、具体的な対策を示してこそ意味がある。県民・市民にも森林の荒廃に責任の一旦を担う自覚が求められる。温暖化や環境破壊は、もう待ったなしの状況に來ているのだから政治に任せず、自らが成すべき課題を見つけて自ら行動するようにならなければならない。

恒例の木つかい運動：森林循環フェアは、藤沢市の湘南モール2F・イベントホールを借り切って実施された。当会からは、ホールの正面入口の2/3を使って「緑のダム・FSC材積木」1万個を出品した

循環フェアエリアは、終日、盛況で、木製品の新しい試みに大勢の人々が関心を示して集まった。

特に、7日(土)、8日(日)は、大盛況で、終日、家族連れが群がって会場を大賑わいにした。写真のような作品を作った人がいたが、どうも建築関係の専門家らしい様子なので職業を聞いたら、建築士だという事で「こんな別荘を建てて住んでみたいですね〜」と笑っていた。



・疑問に思った事がある。

「木つかい運動、森林の循環フェア」ということだが、木製品だけの展示・広報で木を出発原料とした新しい発想が出ていない。

冠頭に記した、パルプや木質バイオマスエネルギー利用、リグニン、セルローズ、炭化物などの活用などのアプローチもないし、「使って、植える」訴えがない。そう言う意味で、木材利用だけでなく、これらの技術への取り組み発表があっても良いのではないか。行政の縦割りシステムの欠陥ではなからうか。

例えば、数年前、県の科学振興課では、木質バイオマスエネルギー可能性調査をしたが、報告書では「難しい」と早々に結論を出してしまっていて、続くものがない。例えば、欧州では木質バイオマスエネルギーの地域暖房や売電の成功事例が沢山ある。化石燃料の有限を心配するより、無限の太陽エネルギーの利用を木にも求められるし、間伐材の杉やヒノキでパルプが出来る。杉の繊維が長いからと言う理由だけで外材輸入に頼っている。わが国には外貨があるからと業界や行政は、安易に走っているように感ずる。

相模原市（市民協働事業）公開ヒヤリング：10月12日（木）

今年から採択の、相模原市行政との市民協働事業への当会のテーマは、「林地団地化・集約施業：小原本陣の森」で、集約施業そのものの考えは、随分前から考えられていたものだが、3年前の京都の日吉町森林組合が形にしてから、急速に取り上げられるようになった。昨年、この仕組みの成功事例、群馬・多野東部森林組合を実際に見学して納得したので、好奇心が強く実践力がある当会は、集約施業を市民協働事業として名乗りを上げた。案の上、森林組合でさえ難しい取り組みを、月一回しか作業しない市民団体・森林NPOに出来るわけがないと冷やかされたが、そう言われれば言われるほど情熱を燃やすのが当会の特徴だ。

ヒヤリングでの発表内容	全 35 区画中、整備済	7 区画		
	整備中	2		
	整備予定	3	計 13 区画	進捗率 35.1%
	未着手	22	率 65.9

月一活動で、森林組合のように法的支援も資金の支援もない森林 NPO として、進捗率が 35.1%の持つ意味は何か。当会が森に入るようになって地域の地権者の方々が、自分の森に入るようになったと言う興味深い事も起こっている。

いま一つ、当会のこの取り組みの特徴は、植生・生態系・土壌・地形・水質調査などに力点を置いていることである。50年・100年単位で森林を考える時、目先の生産性に捉われない森林経営を考えるなら、性急に林道づくりなどに取り組まない方が良い。白亜紀期造山の砂礫層からなるこの森は、崩壊し易いから安易に林道をつくることは、森林全体を崩す恐れだである。当会は、酒井秀夫教授（東大）のアドバイスを受けて架線集材を検討し始めた。森林経営は、慎長に・長期見通しを付けねばならない。

審査員との質疑応答では、① NPO が果たして、集約施業を全う出来るのかどうか。回答として、結果の通りだし、② 行政との協働関係はどうかの質問に対し、十分だとは言えないが、仕事の内容は理解し合っていると答えた。双方、付き合いは未だ半年目だが、努力をしている。

More trees (坂本龍一事務所) 訪問：11月19日(木)

センメリの坂本龍一事務所から、「森林の保全・再生を一緒にやらないか」と言うアプローチを受けた。その内容は ① 排出権取引の拡大に取組みたい、② 木材利用について新しいアイデアの創造に取り組みたい、・・・と言う事であった。

① の排出権取引については、排出の多い国が、少ない国から排出量を買って取ってもらうと言う・・・、論理に釈然としないから直ぐ、乗りましょうと言う訳には行かない。② の木の有効利用は「森林の持続的保全・再生」が当会の柱の一つであるから乗れる話だ。伊勢丹あたりで作品発表をするセンメリのような造形センスを当会は持ち合わせないので、興味をそそられる話。

この十数年、森に関わっていると、なまなかの人造造形では作れない自然の造形・色彩に出会う事がある。そんな事を世に問うてみたい。そう言う話に繋がるなら、坂本事務所との接点ができる。何れにせよ、全く異なる業界にいるもの同士の思想が一致したのだから、時間をかけてお互いの役割を探って行きたいと思う。

緑のダム・法案提出：(国土交通省前原大臣、11月17日、読売)

森林(樹・土壌)の保水力から当会は森林活動の名称を「緑のダム北相模」を名乗って10年を経過している。60年生の杉1本から、ドラム缶に水1.5本が取れる。豊かな森の保水力は、痩せた森の約8倍はある。だから当会は「緑のダム」と言っている。この報道では、専門家(エセ専門家)が「山に洪水を防ぐ力がない」と言っていると言う。新聞の影響力

ウェブ上では
著作権の観点から
記事を省略しました。

を大切にしてほしい。

森林資源・木の利用：木質バイオマス

一般に木を使う事は、殆どの人が建築だと思っているが、輸入材の50%はパルプに使われている。また、欧州では40%が木質バイオマスによる発電である。北米・南米のバイオ燃料は、2000万キロリットルだが、我が国では3万キロリットルである。

ウェブ上では
著作権の観点から
記事を省略しました。

当会では、4年前に県の科学技術振興課と「木質バイオマスエネルギー調査」をしたが、木材が出てこない（丸太の搬出林道がない）事と需要システムがない事で早々に「難しい」と結論付けてしまった。

難しいなら何故、難しくない方法を探さなかったか。当時、当会には意識が未だ、そこまで行っていなかった。

森林が国土の70%もあるのだから、搬出コストを下げる技術・搬出システムを考えれば良い。当会の取り組む「小原本陣の森」は白亜紀の造山であるから岩盤・土壌が脆く、地形が急峻だから架線による搬出に見通しを付けている。土壌の脆いこんな所を根の張らない針葉樹林にしたことにも問題がありそうだ。

森林以外にこれと言った資源のない我が国のアプローチは、環境に負荷をかけない持続可能な木質バイオ燃料の追及であり「量より質」を徹底させる方針を明確にすべきである。人口増により10億人が飢餓で苦しむ時代が来るというのに「トウモロコシ」をエタノール燃料にしているが、それはおかしい。「持続可能な森林資源・木」を「使って・・・植える」効率=品質の良いエネルギーに変えることを相模原市に提案する。

これまで、農業技術でも工業製品でも日本の製品は品質的に世界をリードしてきた。バイオ燃料も我が国が環境面で高品質である事を世界に示す事が可能ではないか。適切な林業経営を編み出して、美林の国・日本を形に出来るなら、スイスに負けない観光資源国としても、行ける筈だ。

1月の活動：第1日曜日は3日で、ここでは10日までは森に入らないと言われてから活動は、第三日曜日：17日だけとします。17日は、活動終了後、新年会をセンター、ル・ポンで行います
男性；2000円、女性：1500円、学生500円

.....
活動のモットー： 急がず、楽しく、無理せず、休まず、ボチボチと.....
そして、沢山の参加で森は良くなる。

名 称： NPO 法人緑のダム北相模
事 務 局： 154-0023 東京都世田谷区若林3-35-9
発行人： NPO 緑のダム北相模・運営委員会：03-3411-1636
H P： http://midorinodam.jp
E-mail： info@midorinodam.jp
協働団体： 神奈川県（政策部土地水資源対策課、環境農政部森林課、県央地域県政総合センター） セブンイレブンみどりの基金、相模原市（市民協働推進課）
毎日新聞社（水と緑地球環境本部） JFEメカニカル
ご支援の団体： WWF・japan, イオン財団、市民社会チャレンジ基金、神奈川県建具協同組合、生命の森宣言・東京、東海大付属・望星高校